

## 実習ワークシート集を用いた学生の使用感

## ーソーシャルワーク実習に実習ワークシート集を用いてみての考察ー

○ 周南公立大学 氏名 井上 浩 (会員番号 02450)

小林 武生 (周南公立大学・05982)、守本 友美 (周南公立大学・01619)

キーワード：ソーシャルワーク実習・ソーシャルワーク実習指導・ソーシャルワーク教育

## 1. 研究目的

社会福祉士養成に関わる新カリキュラムが2019年に開始され、ソーシャルワーク実習の時間数増加に伴った対応も各社会福祉士養成校で少しずつ試みられている。しかし、それらはいくまで「手探り」の状況を逸していない。こうした状況は本学でも何ら変わるころはない。さらに、社会福祉士養成校である以上、厚生労働省シラバスにある「教育に含まれる10項目」をいかに実習先と共有し、その遂行を行っていくことが求められている。そこでは、学生への実習教育効果を高めると同時に、実習先指導者の指導負担感を軽減する取り組みも持ち合わさなければならない。

学内実習担当者内では、これまでの実習のように、実習プログラムを実習先で検討し、学生の実習テーマと摺り合わせるだけでは、「教育に含まれる10項目」は到底達成できないと判断した。そこで、学生も取り組みやすく、かつ実習指導者からも「これなら普通の業務を学生に見せたり、説明したりすればできる」というワークシートを開発する必要があった。「教育に含まれる10項目」において、学内実習担当者がそれぞれ自分の力量を發揮しやすい箇所のワークシートを作成し、打合せを繰り返しながら最終的には実習懇談会で実習指導者への周知を行った。それでも、実習先でワークシート集への取り組みには大きな差が生じ、今後のワークシート集改訂に向けてまず学生は本ワークシート集が使いやすかったのか、ワークシート集に学生自身はどのような意義を見いだしていたのかを調べることから開始した。

## 2. 研究の視点および方法

本研究に取り組むきっかけは、実習巡回の際に巡回担当教員による学生への指導において、「施設系と機関係では、記載しているワークシートに相違があり、この差をいかに埋めていくのか」ということであった。そこで研究方法として、実習事後指導を受けた学生を対象に、①作成の有無、②作成した場合の作成のしやすさ、③作成のしやすさの評価の理由、④作成のしやすさの評価が低評価であった場合の理由、⑤作成していない場合その理由という五つの質問項目を設け匿名でWEBアンケートを実施した。なお①については選択式、②については四件法で、③については自由記述で、④および⑤については選択式の設問で回答を得るよう設計した。なお、今回は基礎的データの収集が目的であり、集計は単純集計である。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、「実習ワークシート集改善を目指した学生の使用感」として周南公立大学研究倫理委員会による研究倫理審査を受審、承認されている。(承認番号 12: 令和5年10月23日) 調査は実習事後指導を担当していない教員が行い、調査対象者である学生にはアンケートに回答しなくても成績とは無関係であることを強調して伝えた。本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業などはない。

### 4. 研究結果

回答数は10件であり、回答率90.9%であった。当初作業仮説として立てていた「利用者に対して生活の場で直接的な支援を行う施設と、生活の場で直接的に支援を行わない相談機関では、ワークシートの記載状況が異なる」という点を明らかにするために、ワークシートの記載状況(ワークシートに記入したか否か)と実習施設の種別(施設もしくは相談機関)のクロス集計を行った。ここでは紙幅の都合上、結果をすべて記載することはできないが、例えばすべての学生が作成したワークシートは、「教育に含むべき10項目」の「利用者や地域の状況を理解し、その生活上の課題(ニーズ)の把握、支援計画の作成と実施及び評価」に係る「個別アセスメントシート」であった。次に、作成した割合が高いワークシートは、「利用者やその関係者(家族、親族、友人等)、施設・事業者・機関・団体、住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや円滑な人間関係の形成」に係る、利用者がどのような人とかかわっているかを記入する、コミュニケーションに関連するワークシートであり、同じく「利用者や地域の状況を理解し、その生活上の課題(ニーズ)の把握、支援計画の作成と実施及び評価」に係る「地域アセスメントシート」であった。一方で、作成している割合が低かったのは、実習中行う機会がなかったという理由により、「ソーシャルワーク実践に求められる技術」のうち、「アウトリーチ」、「ネゴシエーション」および「ソーシャルアクション」であった。これら実践技術のワークシート記入が低い点については、例えば巻(2022)も「技術の実践的理解は、教育に含むべき事項10項目のうち、『新カリ実習検討可能』の回答項目が最も低かった」と示しているところである。

### 5. 考察

学生の実習計画書に基づき、実習内容を絞った上で実習ワークシートに取り組んだことで、学生と実習先両者が「何を実習で注力するか」の合意を得やすかった。利用者の個別状況を把握するためのアセスメントシートやSWOT分析を通じた地域アセスメントシートなどは記入頻度が高かったが、「技術の実践的な理解」の一部の項目のように、実習期間内では到底なしえないであろう項目については、せいぜいが「講義」に終わってしまい、ワークシート作成にまで至らないということも見受けられた。ワークシート集の改訂を通じて、「講義」であっても学生が実習を通じて得られた現場の臨場感を実感できるよう今後も実習指導のあり方を模索し続けていきたい。